



TITLE:

刊行にあたって

AUTHOR(S):

山本, 博之

---

CITATION:

山本, 博之. 刊行にあたって. CIRAS discussion paper No.67 : 不在の父 -- 混成アジア映画研究2016 2017, 67: 4-5

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228843>

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

## 刊行にあたって

2017年、マレーシア映画『タレントタイム』(ヤスミン・アフマド監督、2009年)が『タレントタイム〜優しい歌』の邦題で日本全国の劇場で上映されることになりました。2009年のマレーシアでの劇場公開以来、日本でも、アジアフォーカス・福岡国際映画祭での上映をはじめ、各地の映画祭や特集上映などで『タレントタイム』が上映されてきました。混成アジア映画研究会の前身であるマレーシア映画文化研究会でも、毎年『タレントタイム』の自主上映会を行ってきました。これほどまでに上映が待望されてきた「伝説の映画」は、今の時代にこそ観たい作品だという高い評判を得ています。

民族や宗教の間に壁が存在することを描きながらも、それを乗り越えようとしていく姿を描いた『タレントタイム』は、確かに、出自により自他の区別をはっきりさせ、純粋なものに比べて混成的なものを劣ったものとして排斥する傾向が強まりつつあるかに見える今日の世界と日本の行く末を考えるのにちょうどあった作品だと言えるかもしれません。でも、『タレントタイム』はいつの時代に観てもよい作品なのだろうと思います。

『タレントタイム』の魅力がどこにあるのかを一言で語るのは簡単なことではありませんが、それは時代と地域を超えた価値と関わっているように思います。『タレントタイム』は、20世紀後半から21世紀初頭にかけてのマレーシアを舞台にした物語であり、そのため、この時代のマレーシアで見られる民族間・宗教間の関係が下敷きになっています。例えば、マレーシアではマイノリティの権利が保障されていますが、現実には多数派による一方的な態度も見られないわけではなく、開発のためにヒンドゥ寺院が破壊されることが増えており、2007年には多くの反対にもかかわらず築100年以上のヒンドゥ寺院が破壊されています。劇中でマヘシュの母親がガネーシャのことを指して「あの子が建てたお寺を連中が壊しても広い心で許したのに」と言っているのはこのことを踏まえたセリフです。

また、ガネーシャが結婚式の準備をしているとき、手入れされていない腋毛を指してマヘシュの母親が「レクチュミお婆さんの口ひげよりボウボウだ」というセリフがあります。女性であるお婆さんにボウボウの口ひげが生えているというのはちょっと変ですが、これはヤスミン監督の知り合いに口のまわりの産毛が濃いレクチュミお婆さんという女性がいて、そのことを念頭に置いた「楽屋落ち」のようなものです。

『タレントタイム』には、このように、マレーシアの人なら誰でも知っていそうなことからヤスミン監督のごく身近なことまで含めて現実のできごとをあれこれ織り込み、それを現実の特定の出来事であると明示せずに物語にしています。だからこそ、現代のマレーシアで作られた物語でありながら、いつの時代に観ても人々の心を打つ作品になっているのではないかと思います。

このように考えると、『タレントタイム』は、マレーシア映画でありながら、マレーシアという地域性を超えた映画であるとも言えます。「東南アジア映画」あるいは「混成アジア映画」というジャンルをどのように考えることができるのか、本研究会で引き続き考えていきたいと思っています。

本書は混成アジア映画研究会の2016年度の研究内容をまとめたものです。混成アジア映画研究会では研究会HPで作品レビュー等の記事を公開しており、本書に掲載された記事は研究会HPの記事を再構成したものを含んでいます。

第1部は研究会メンバーによる混成アジア映画に関する論考で、今号は「不在の父親」というテーマを掲げています。ただし、前号同様、このテーマについて深く掘り下げるといよりも、このテーマに緩やかに関わりながら、なるべく素材やアプローチを多様にするような論考を集めています。個別の論考の内容とともに、素材やアプローチの多様性も味わっていただければと思います。

第2部の「混成アジア映画の現在」では、国・地域別あるいはテーマ別に映画を紹介しています。今号では、主にヒット映画に目を向けることで、シンガポール、タイ、ラオス、カンボジアのこの10年程度の映画界の状況を紹介しています。『地域研究』の「混成アジア映画の海」特集号の第Ⅲ部のアップデート版としてご覧いただければと思います。

第3部の資料編は、2016年に公開されたフィリピンの映画『痛ましき謎への子守唄』について、作品の概要および背景情報をまとめています。この作品は上映時間が8時間ととても長いことに加えて、観客がフィリピンの伝承や史実や小説についての知識を持っていることを前提としているところがあるため、理解を助けるように背景情報を紹介しています。

混成アジア映画研究会は、京都大学地域研究統合情報センターの公募共同研究「危機からの社会再生における情報源としての映像作品——東南アジアを事例として」(2015年4月～2016年3月、代表：篠崎香織)との共催により実施しています。なお、地域研究統合情報センターは2017年1月より東南アジア研究所と統合して東南アジア地域研究研究所となり、上記の共同研究は東南アジア地域研究研究所のCIRASセンター(Center for Information Resources of Area Studies)のもとで継続されています

研究会の開催にあたっては国際交流基金アジアセンターの、公開シンポジウム・セミナーの開催にあたっては大阪アジア映画祭、アジアフォーカス・福岡国際映画祭、東京国際映画祭のご支援を賜りました。研究会の活動にご理解とご協力下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所  
山本 博之